文殿御覽也、今無傳本、按太平御覽鱗介部十二引臨海水土記曰、新婦魚、似雌魚長一丈、又鱗介部十引南越記、鱕魚、鼻有横骨、如鐍、海中波浪爲之涌、海船逢之必斷、是二魚並載、則新婦魚與鱕魚不同、而漢語抄以鱕魚爲加勢佐波、辨色立成以新婦魚爲加勢佐波者、二家其說不同也、源君以其所訓同、合鱕新婦魚爲一者誤、按新婦魚未詳何物、

〔倭名類聚抄十九龍魚〕鮪魚　唐韻云、鮪音甫、辨色立成云奈波佐波、大魚名也、

〔箋注倭名類聚抄八龍魚〕按廣韻鮪訓大魚、音甫在上聲九虞、又鮪、鮪鱘魚名、亦作鮪、音逋、在平聲十一模、雖有二音、然其義無異、鮪鱘一名江豚、然則此所擧鮪魚卽上所載鱘鮪、源君分鱘鮪鮪魚爲二條、非是、辨色立成訓鮪爲奈波佐波、不允、源君從之亦非、

〔類聚名義抄十魚〕鮪音甫　ナハサバ　鯖音青　アヲサバ　サバ　鱕音番　カセサバ　鰍サバ　鰓アヲサバ

〔下學集上氣形〕鯖サバ

〔書言字考節用集五氣形〕青魚本草同、サバ　鯖上同、サバ　刺鯖

〔日本釋名中魚〕鯖　さばは小齒也、さはさゝやかの意小也、此魚こと魚にかはりて齒小なり、

〔東雅十九鱗介〕鯖アヲサバ略○中　サバの義不詳、古語に多きを謂てサハといふ、其聚る事、多なるを云ひしに似たり、（中略）蘇頌圖經に、青魚生江湖間と見えて、字亦作鯖、此にいふサバとは見えず、舜水朱氏も青魚サバにはあらず、大なるもの五六尺に至るといひけり、さらば食經に見えし所の如きは、其名同じく物異なるなり、朝鮮の俗、また青魚といふものあり、東醫寶鑑にも圖經本草を引て、非我國之青魚也と注せり、彼にして青魚といふは、（中略）此にしてはニシンといふもの是也、

〔倭訓栞前編十佐〕さば　倭名鈔に鯖をよめり、小齒の義、他魚に異れりといへり、されど鈔にはあをさばと見ゆ、鯖の字西土にいふ物は異れり、唯崔氏食經の說相似たり、南產志にいふ青貫も亦近し、貝原氏の說に夏秋漁人夜此をつる、漁火千万海上に連り、觀者目を驚かす、伊勢物語の歌に、